Ⅱ　知的障害のある児童・生徒を対象とした教育内容・方法の充実事業報告

知的障害のある児童・生徒を対象とした教育内容・方法の充実事業
各教科等を合わせた指導充実検討委員会

＜委員＞

菅野　敦	東京学芸大学　教授	専門委員
中坪　晃一	植草学園短期大学　学長	専門委員
下島　啓道	都立久我山青光学園　校長	
安武　ひろみ	都立高島特別支援学校　校長	
坊野　美代子	都立調布特別支援学校　校長	
山本　篤	都立葛飾盲学校　校長	
小川　達夫	都立久我山青光学園　主幹教諭	
廣田　史子	都立調布特別支援学校　主幹教諭	
小宮山　都美	都立葛飾盲学校　主幹教諭	
積田　寛美	都立高島特別支援学校　主任教諭	

「生活単元学習」の単元づくり

「生活単元学習」とは

生活単元学習では、児童・生徒が「生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的に」学習します。

つまり、「実際の生活に結び付いた」活動に取り組み、成功体験を増やすことで、児童・生徒の自主的・自発的な態度を育てることが生活単元学習の目標となります。成功体験を多くするためには、児童・生徒の「できること」を見つめ、「できる状況」を整えて、児童・生徒が自信をもって取り組むことができる活動を設定しなければなりません。

児童・生徒の「できること」を十分把握し、現在やこれからの生活に結び付くような活動に、見通しをもって取り組むことができるような「単元づくり」を行うことが大切です。

生活単元学習の「単元づくり」とは、学習活動における「一つのまとまり」をもった「ストーリー（物語）」を組み立てることと言えます。児童・生徒と共有できる様々な「ストーリー」を創っていきましょう。

単元づくりの「４つの大切なこと」

都教育委員会では、研究指定校における授業実践に基づき、「単元づくりで大切なこと」を次の４つにまとめました。

1　児童・生徒が言える単元名にする。

単元名は、目標や到達点を共有し、活動への意欲を高める「合言葉」となるものです。分かりやすく、言いやすい単元名を工夫し、児童・生徒と教員とが心を一つにして単元に取り組むことができるようにします。

2　分かりやすい単元の到達目標を設定する。

単元の「ゴール」を明確にします。単元名と同様、児童・生徒にとって分かりやすく、見通しがもちやすい到達点を設定します。

3　児童・生徒が「今できること」を大切にする。

「うまくいった」「自分でできた」と実感することができる活動により、人から認められたり褒められたりする経験を多く味わうことができるようにします。そのためには、児童・生徒の「できること」の把握と、「できる状況づくり」が重要です。

4　テーマに沿って様々な活動ができるように工夫する。

到達目標の達成に必要十分な様々な活動で単元を構成することで、児童・生徒の実態に応じた役割分担が工夫できるようになります。一連の活動に繰り返し取り組む時間の設定や、一人一人の活動量を確保することなどが重要です。

※　詳細は、東京都教育委員会発行「東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画に基づく都立特別支援学校の指導内容充実事業報告　教師一人一人の専門性を高めるために」（平成 25 年３月）、「平成 25 年度東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画に基づく都立特別支援学校の指導内容充実事業報告書　特別支援学校の教育内容の充実」（平成 26 年３月）を御参照ください。

「単元づくり」の改善に向けて

単元づくりに当たり、考慮する視点を段階別に示しました。日頃の授業をチェックして、改善に向けた課題を整理しましょう。

チェック1

□ 「今できること」を大切にした授業づくりができているか。

児童・生徒（一人一人）や集団の「今できること」に着目して毎時間の授業を見直してみましょう。児童・生徒への直接的な働きかけや支援をできるだけ少なくして、自分自身でできる活動にするための教材や動線を工夫します。

これまでの他の教科等での学習経験や、児童・生徒（一人一人）の「できること」を書き出すところから授業づくりを始めてみましょう。

チェック2

□ 一人一人に十分に活動できる「役割」があるか。

児童・生徒（一人一人）の「できること」を授業の中で生かしながら単元を展開するためには、個に応じた「役割」が必要です。複数の、様々な種類の役割をつくることができるよう、テーマに沿ったいろいろな活動を計画・構成します。それぞれの児童・生徒が、「役割」を果たすことで達成感を得られるよう、単元テーマとの関連性が分かりやすく、到達目標の達成に必要な活動を工夫しましょう。

チェック3

□ 見通しをもって取り組める展開・構成となっているか。

活動の種類や取り組む順番は、到達点に向かって自然な流れになるように構成します。その際、時間割や週当たりの授業時数等を考慮し、児童・生徒にとって到達点が分かりやすいような展開や単元の時数配当を工夫します。

チェック4

□ 意欲が高まるスローガン（単元名）や到達点があるか。

単元の目標、到達点は、児童・生徒と共有できる内容になっていますか。また、単元名は児童・生徒の実態や年齢にふさわしい表現となっているでしょうか。単元名は、児童・生徒と教員が「一緒に取り組む」ことを大事に設定します。単元への意欲を高めるようなテーマ曲や衣装を用意し、授業への導入をスムーズにすることも工夫の一つです。

「単元づくり」の手順

1　単元テーマの設定

単元テーマの設定に当たっては、次の点に留意しながら構想をまとめます。

「今できること」を大事にする

- 児童・生徒の得意なことや自信をもって取り組めること、興味・関心のあることなどの「できること」を十分に把握します。
- 児童・生徒の人数や実態を考慮しながら、展開の中で、それぞれの「できること」に応じた役割分担ができるような活動を設定します。

見通しをもって取り組むことができるような展開

- 児童・生徒の年齢や時間割等を踏まえ、見通しや意欲が持続する学習期間を考慮した指導時数や展開となるようにします。
- 展開は、テーマに沿った自然な流れのある活動で構成します。

2　単元指導計画の作成

単元指導計画は次の項目順に考えていくと計画しやすくなります。

	＜実践例「かだんをつくろう」の場合…＞
「到達点」を設定する。	到達点：「かだん」の完成
↓	↓
「主となる活動」を設定する。	主となる活動：「かだん」づくり
↓	↓
「関連する活動」を書き出す。取組む順番や取り組み方（全員で、分担して、など）を考える。	関連する活動： リヤカーなどの道具の用意 「かだんにっき」づくり 苗の買い物 発表会の準備
↓	↓
「単元名」を設定する。	単元名：「かだんをつくろう」

→この単元の実践例は24ページから

3　「単元」の見直しと改善

作成した単元指導計画を「４つの大切なこと」に沿って見直してみましょう。複数の教員で話し合いながら見直すことができると、より充実した単元となります。

例1 「単元名」を改善した事例

当初の単元名：
「地域に花を咲かせましょう」

→

改善後の単元名：
「○○商店街に花をプレゼントしよう」

見直しのポイント

単元名から到達点や「主となる活動」がイメージできるか。

地域との交流を大事にした中学部の単元づくりの例です。当初の単元名は抽象的で活動がイメージしにくいため、再度活動内容を整理し、ふさわしい単元名を付け直しました。作業学習で作った鉢カバーに寄せ植えをして通学路の商店街にプレゼントするという到達点が分かる単元名になりました。

例2 「到達点」を見直した事例

当初の到達点：
モルモットについて調べたことの発表

→

改善後の到達点：
モルモットの部屋（モルハウス）の完成

見直しのポイント

児童が興味・関心をもって取り組める内容であるか。

日頃触れ合う機会の少ない生き物について、学習し、調べたことを発表する活動は、児童が興味・関心をもちにくく、取り組みにくい内容であると思われました。モルモットを教室に招き、一緒に楽しく遊ぶために、必要なことを調べたり聞いたりする活動を取り入れた単元に修正し、単元名も「モルハウスをつくろう」としました。

→この単元の実践例は30ページから

例3 「できること」にこだわった指導計画の修正

単元名：「ヤギさんのかくれんぼ」（劇遊び単元）

当初の活動：
メロディベルの演奏

→

改善後の到達点：
タンバリンの演奏

見直しのポイント

児童が自分で取り組むことができているか。

小学部低学年の、「劇遊びを楽しむ」ことを到達点とした単元です。演奏経験の少ないメロディベルを「演奏できるように」するよりも、「自分自身で演奏できる」タンバリンを使うことに変更しました。児童・生徒にふさわしい活動内容であるか、日々の授業の中で見直し、検討することも大切です。

→この単元の実践例は36ページから

実践例１「かだんをつくろう」

学校の校庭の一画を、児童自身が耕して「かだん」を造った、「働く」ことをテーマとした単元です。

- ◆ 学校・学部　知的障害特別支援学校　小学部６年　１３名
- ◆ 活動の期間　９月～10 月（６週間）
- ◆ 指 導 時 数　１６単位時間

単元の構想

学校では、学年ごとに菜園用のスペースが割り振られ、毎年様々な野菜作りに取り組んできました。「畑」での作業を題材に、土づくりや雑草取り、種まきなど、様々な活動を展開し、手順や道具を工夫することで、それぞれの「できること」を生かした単元をつくりたいと考えました。

割り振られた「畑」は狭く、児童全員が十分活動することが難しい。順番を待つ時間も長くなってしまう。
もっと一人一人の活動量を充実させたい。

毎時間、児童が「できた」「がんばった」と思えるような活動にしたい。短期間で変化や成長の様子を見ることができるように、野菜ではなく花の苗を植える活動にしたらどうか。

何もない雑草だらけの土地が、少しずつきれいに整えられて、最後は花でいっぱいになったら変化が分かって達成感が味わえるにではないか。「かだんづくり」の単元に取組んでみよう。
教師も、児童と一緒に汗を流して頑張ろう！

児童の意欲を引き出すような単元のきっかけがあるとよい。校長先生から「かだんづくり」について話してもらったらどうか。

- ● 校庭の一画を利用して、自分たちで一から「かだん」を造り上げる活動にする。
- ● 変化の様子が明確で、達成感が得られるよう、花の苗を植えた「かだん」の完成を到達点とする。

単元づくりに当たって工夫した点

「４つの大切なこと」を踏まえ、特に「見通し」「意欲」「達成感」をキーワードに単元づくりを行いました。

◇　単元への見通しがもて、活動意欲が高まるように ～導入の工夫～	校長先生から「かだんづくり」の依頼を受け、「校長先生の期待に応えて、みんなで力を合わせてきれいなかだんをつくること」を単元の目標としました。
◇　毎時間の活動に見通しをもてるように ～本時の「ゴール」の提示～	「かだんづくり」の整地では、範囲が広く活動への見通しがもちにくいため、土をふるう区画や雑草を取る区画など、その時間に行う部分を線で区切り、どこまで作業を進めるかを明確にしました。
◇　一人一人が十分活動し、責任をもって取り組むことができるように ～役割分担～	「かだんづくり」の話し合いや準備など、全員で活動する場面と、花壇を縁取るレンガを並べる活動や土を耕す作業など、分担して取り組む場面を設定し、どの児童も役割をもって活動できるようにしました。
◇　達成感を味わうことができるように ～活動の振り返り～	毎回、その日の作業の様子を記録係が写真に撮り、「かだんにっき」を作成することにしました。 また、作業の途中経過を「依頼主」である校長先生に報告して、現場を見てもらい、励ましてもらいました。

「かだん」の完成の後は、「かだん発表会」を開いて、学校のみんなや保護者に紹介することにしました。
そのための準備や発表会の進行の練習も、単元の指導計画に加えることにしました。